HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	逸見勝亮前教授について
Author(s)	所, 伸一
Description	特集I　逸見勝亮前教授記念特集
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 103, 1-9
Issue Date	2007-12-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/30333
Type	departmental bulletin paper
File Information	103_1-9.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

逸見勝亮前教授について

所　　伸　一*

A Profile of Ex-Professor Masaaki HEMMI

Shinichi TOKORO

北海道大学教育学研究科前教授逸見勝亮氏（1943 年 6 月 3 日生）は、1966 年 3 月北海道大学教育学部教育学科を卒業し、1969 年 3 月北海道大学大学院教育学研究科教育学専攻修士課程を修了、1974 年 3 月同上教育学研究科教育学専攻博士課程を単位取得退学し、同年 4 月より教育学部助手として北海道大学に採用となった。以後、1979 年 4 月より教育学部助教授、1991 年 3 月に教育学部教授に昇進、2000 年 4 月に北海道大学大学院教育学研究科教授に配置換えとなり、2007 年 3 月に教授を退職するまで奉職した。

教授は、教育学部においては近現代教育史、教育学概説Ⅱ、教職入門、基礎演習Ⅱおよび専門演習（教育史比較教育）などの講義・演習を、全学教育においては平和の学際的研究の組織と講義を、大学院教育学研究科では教育史学と教育学研究調査実験、教育史及び比較教育学特殊研究などの講義・演習・論文指導をそれぞれ長年担当し、幾多の卒業生・修了生を送り出した。

教授は、主たる領域である近現代日本教育史の研究においては、きわめて蓄積の薄かった 1930 年代から敗戦までの時期を対象とした師範学校史を追求した。軍隊教育とともに国民教育の学校体系の基軸に位置づいていた師範学校に関する文部省の政策と制度の実態について文部省所蔵公文書等を基本資料として実証し、教育制度の改革を必要としまた制約もする現実的基盤や歴史的条件の解明を行うことにより新たな教育史を描いた。これが単著『師範学校制度史研究－ 15 年戦争下の教師教育－』（1991 年、北海道大学図書刊行会）としてまとめられた。逸見教授はこれを学位請求論文として提出し、北海道大学より 1991 年 9 月、博士（教育学）を授与された。

教授の研究は、その後、学童疎開史、浮浪児・戦争孤児史、少年兵史、戦没者寡婦教員養成所史等へと広がりを見せ、これが数々の学会発表、学術論文に結実した。それらのうち学童疎開については、従来個人の回想記や学校・地域の記録等として語られることが多かった戦時下のこの実態を、はじめて歴史学的な実証的操作によって研究し、軍事・戦争史の文脈に位置づけ、学童疎開は子どもたちの戦闘配置であったことを明らかにした。逸見教授はこれを『学童集団疎開史－子どもたちの戦闘配置－』（1998 年、大月書店）として単著にまとめた。その出発点に位置づく「学童疎開史研究序説」執筆後の「補足あれこれ」では次のように記していた。「子ども状態史」の「はじめ」は「『大東亜共栄圏』各地の戦災孤児（あるいは日本軍・日本人に殺された子ども、そして両親を殺された子ども）」、「むすび」は「沖縄戦・都市空襲と戦災孤児」となるはずです。」（『研究・教育の報告』第 2 号に掲げられ

* 北海道大学大学院教育学研究院教授

ている）。教授は学童集団疎開史を集成すると同時に、さらに自分史と戦後教育史とを重ねながら、子ども状態史を 20 年にわたり研究し続けてきた。そして研究科退職後も浮浪児・戦争孤児史をはじめとする現代日本子ども状態史研究を継続している。その過程においては、多くの学童疎開関係者・団体と交流を続け深めるにとどまらず、『学童集団疎開史』の終章に「学童疎開体験と相渉るために」と副題をつけているように、当事者の体験をじゅうぶん説明しうる歴史分析・叙述をめざしている。

ここで特記しておくべきことは、逸見教授が、教育と研究とを区別することなく常に現在進行形の研究を講義し続けたことである。まさに、「教育の場でこそ研究が発展する」（『北海道の教育 97 年版』）ということを実践し続けたのである。教育史学会代表理事として述べられたメッセージの一部を引用する。「勤労動員・少年兵・学童疎開・戦没者寡婦教員養成所・敗戦後の奉安殿・戦争孤児・浮浪児・新制中学・校歌の変遷・自衛隊生徒・〔天皇〕行幸と児童の奉迎などを講じていて、受講学生の一人が、『教育史って、法律や制度ばかりかと思っていたけど、ひとりひとりがどう生きてきたかを考える学問なんだ』と感想を述べた。僕にとって模索を解きほぐす鍵である。」

さて、教授は、関連の諸学会においては数々の研究報告・発表を行うと共にその運営の要職を担ってきた。このうち教育史学会では 1992 年より 2007 年まで理事であり、その間 1991 年より通算 3 期機関誌編集委員（ 1998 年から一期 2 年は委員長）を、また 2001 年からは事務局長を、 2003 年より 2007 年まで代表理事を務めた。日本教育学会においては機関誌『教育学研究』編集委員（ 1991 ～ 1993 年）をつとめ、 2001 年より現在は理事である。このほか大学教育学会においては 2003 ～ 2006 年に理事、北海道教育学会においては 1992 年より現在まで理事の任にある。このように教育学関連諸学会の発展に貢献してきた。

また教授は、北海道大学の管理運営においては数々の全学委員および管理の要職を兼ねてきた。それらの委員会は、入学者選抜制度調査委員会（ 1981 年～ 1982 年； 1983 年～ 1984 年）、教職課程委員会（ 1987 年～ 1994 年）、教養部連絡教官のち教養部教員会議委員（ 1989 年～ 1990 年）、図書館委員会（ 1990 年～ 1994 年； 2000 ～ 2002 年）、学生委員会（第二小委員会委員長、 1995 ～ 1999 年）、教務委員会（研究科長・学部長職指定、 2002 ～ 2005 年）、創成科学研究機構運営委員（研究科長・学部長職指定、 2002 ～ 2005 年）の多岐にわたった。教授はさらに、北海道大学評議員（ 1998 年～ 2005 年）、北海道大学総長補佐（ 2001 年～ 2002 年）、北海道大学教育学研究科長・教育学部長（ 2002 年～ 2005 年）に就いて後、 2005 年 5 月より現在まで北海道大学理事・副学長・図書館長・大学文書館長などとして本学の要衝の一角を担っておられる。さらに学外にあっては、国立情報学研究所客員教授（ 2006 年度から）および日本学術会議連携委員（ 2006 年度から）の仕事を兼ねておられる。

教授がこれまでの研究・教育・管理運営の場面において一貫して示された、自身に厳しく、次の世代に慈しみある態度は、私たちにとり末永く範となるであろう。

最後に逸見教授のますますのご健康と大学内外におけるご活躍を祈念してペンを擱く。

主要業績目録

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行年月	発行所、発表雑誌・巻号
(1)著　書(単著)			
1 師範学校制度史研究 ―15年戦争下の教師教育	単	1991年3月	北海道大学図書刊行会
2 学童集団疎開史 ―子どもたちの戦闘配置	単	1998年8月	大月書店
(2)著　書(編著等)			
1 北大の125年	北海道大学 125年史編集室編 (Ⅰ～Ⅲ章を執筆)	2001年3月	北海道大学
2 写真・絵画集成　学童疎開(全3巻)	監修及び解説	2003年3月	日本図書センター
3 ジェンダーと教育の歴史	橋本紀子・逸見勝亮共編著(戦歿者寡婦特設教員養成所史を執筆)	2003年5月	川島書店
(3)学術論文			
1 北海道近代教育史研究を進めるための覚書	単	1968年 1月	教育史論考第4号
2 1930～1945年の日本における師範教育政策の展開とその特質	単	1970年 1月	北海道大学教育学部紀要第17号
3 満州事変前後における師範学校政策に関する一考察	単	1970年 1月	北海道大学教育学部紀要第17号
4 戦後教員養成制度の変遷	単	1971年 1月	北海教育評論第24巻第1号
5 戦時体制下における師範学校政策の展開に関する一考察	単	1972年 1月	北海道大学教育学部紀要第19号
6 師範学校における「第二部」制度設置の歴史的意義について	単	1972年 6月	教育史論考第5号
7 教員養成制度改革の思想と問題 ―最近における改革諸案の検討	山崎真秀・ 逸見勝亮	1973年 6月	教育学研究第40巻第2号
8 地方財政「窮乏」と教育費政策の展開―1930年代の動向	単	1973年11月	北海道大学教育学部紀要第22号
9 1931年「師範学校規程」改正について	単	1977年10月	北海道大学教育学部紀要第30号

10	戦時下における教育の崩壊過程 ―師範学校生徒の勤労動員	単	1978年 3月	北海道大学教育学部紀要 第31号
11	師範学校「特別学級」について	単	1978年11月	北海道大学教育学部紀要 第32号
12	師範学校制度史研究の課題と方法	単	1979年12月	北海道大学教育学部紀要 第34号
13	傷痍軍人小学校教員養成所の設立	単	1982年 3月	北海道大学教育学部紀要 第40号
14	ファシズム教育の崩壊 ―勤労動員を中心として	単	1984年 4月	講座 日本教育史 第4巻 (第一法規)
15	教育史における1930年代―国家と 教育――日本を中心として―	単	1984年 9月	日本の教育史学第27集
16	日本教育史の研究動向	単	1985年10月	日本の教育史学第28集
17	日本学童疎開史研究序説	単	1988年 3月	北海道大学教育学部紀要 第51号
18	1943年の楠木正成 ―「大東亜戦争」と国民学校教科書	単	1990年 1月	教育史・比較教育論考 第14号
19	少年兵史素描	単	1990年10月	日本の教育史学第33集
20	指定討論 教育研究の50年 ―その総括と展望	単	1992年 3月	教育学研究第59巻第1号
21	学童疎開の目的	単	1993年 5月	法廷に立つ歴史学 (大月書店)
22	第二次世界大戦後の日本における 浮浪児・戦争孤児の歴史	単	1994年10月	日本の教育史学第37集
23	教師教育の立場から―大学教育が果 たしている、果たしえないでいる役割	単	1996年11月	一般教育学会誌第18巻 第2号
24	皇后のビスケット ―集団疎開学童ニ対シ御激励ノ思召	単	1999年10月	日本の教育史学第42集
25	戦歿者寡婦特設教員養成所の設立	単	2000年 3月	北海道大学教育学部紀要 第80号
26	自衛隊生徒の発足 ―1955年の少年兵	単	2002年10月	日本の教育史学第45集
27	札幌農学校の再編・昇格と佐藤昌介	単	2007年 3月	北海道大学大学文書館 年報第2号

(4)書評等

1	資料紹介／阿波根直誠編『沖縄県の戦前における師範学校を中心とする教員養成についての実証的研究』	単	1981年 3月	教育学研究第48巻第1号
2	学童疎開に関する文献紹介 ―水谷洋『学童疎開の記録』を中心として	単	1982年 6月	教育学研究第49巻第2号
3	資料紹介／日本近代教育史料研究会編『資料　文政審議会』(全7冊)	単	1990年 9月	教育学研究第57巻第3号
4	山田昇会員の『師範学校制度史研究－15年戦争下の教師教育』書評に「反論」する	単	1992年 6月	教育学研究第59巻第2号
5	著者から書評者へ 青木哲夫に応えて	単	1999年 8月	日本教育史研究第18号
6	図書紹介／山中恒・山中典子著『間違いだらけの少年H－銃後生活史の研究と手引き』	単	2000年 6月	教育学研究第67巻第2号
7	一條三子氏の拙著『学童集団疎開史』の書評を読んで	単	2000年 9月	歴史学研究第740号
8	大学教育学会シンポジウムⅡ「大学教育の連携」を司会して	単	2004年11月	大学教育学会誌第26巻第2号

(5)史料覆刻

1	北海道教育会雑誌・北海道教育雑誌・北海之教育(全28巻)	覆刻編集委員会	1982～1986年	文化評論社

(6)論文集編纂

1	佐藤秀夫『教育の文化史』(全4巻)	「教育の文化史」編集委員会	2004～2005年	阿吽社

(7)科学研究費受領

		(役割)	(研究種目)	(研究期間)
1	傷痍軍人教員養成所・戦歿寡婦特設教員養成所に関する歴史的研究	研究代表者	一般研究C	1981年度
2	戦時下における学生・生徒の勤労動員に関する歴史的研究	研究代表者	一般研究C	1984年度
3	国民学校初等科児童の縁故・集団疎開＝学童疎開に関する歴史的研究	研究代表者	一般研究C	1986～1987年度
4	少年兵募集方策の展開を中心とする学校と軍隊の結合に関する歴史的研究	研究代表者(共同研究)	一般研究C	1993年度
5	第二次世界大戦後の日本における浮浪児・戦争孤児に関する歴史的研究	研究代表者	一般研究C	1994年度

6	敗戦後の日本における浮浪児・戦争孤児に関する歴史的研究―引揚孤児を中心として―	研究代表者	一般研究C	1995年度
7	戦歿者寡婦特設教員養成所に関する歴史的研究―戦時下における教師教育の変容―	研究代表者	基盤研究C	2001～2003年度
8	発達・学習支援ネットワークのデザインに関する総合的研究	研究分担者	基盤研究A	2003～2006年度
9	敗戦直後の日本における戦争孤児・浮浪児に関する歴史的研究	研究代表者	基盤研究C	2004～2006年度

(8)その他

1	上杉重二郎教授について	竹田正直・逸見勝亮	1978年 3月	北海道大学教育学部紀要第31号
2	「大学の自治」および大学教育をめぐる運動主体の若干の問題について	単	1982年 6月	北海道の教育82年版
3	大学における学生の教育をめぐって	単	1984年 6月	北海道の教育84年版
4	学童集団疎開断想	単	1984年12月9日	名寄新聞
5	臨教審第二次答申と大学教育	単	1986年	「北海道の大学と教育・研究を考えるつどい」報告・資料集
6	教育は研究へ発展するか?―「教育史特講」の試み	単	1988年 3月	研究・教育の報告第1号(北海道大学教育学部)
7	大学における教育改善の試み	単	1988年 6月	北海道の教育88年版
8	僕と天皇、天皇と教育	単	1989年12月	漕ぎ出せ　未明の涛へ＝日本・文学・朝鮮(李恢成文芸講演会・その後の会)
9	大学における教育改善の試み	単	1990年 7月	北海道の教育90年版
10	僕と天皇・天皇と教育	単	1990年 8月	北海道女性史研究第25号
11	研究・教育ならびに教育・研究の報告	単	1992年 1月	研究・教育の報告第2号
12	教育は研究にとってどのような意味があるか―僕の場合	単	1993年 6月	北海道の教育93年版
13	現代日本子供状態史を展望して	単	1995年 3月	研究と教育の報告第3号

14	鈴木英夫と学童疎開史研究	単	1995年 1月	“あの朝”がなかったら（不忘会）
15	僕と天皇―1954年の室蘭で	単	1996年 1月	続　現代史資料(9)付録月報（みすず書房）
16	教育活動の位置の再確認、あるいは授業改善の試み・再々考	単	1997年 6月	北海道の教育97年版
17	現代日本子ども状態史を展望して（その2）	単	1998年 3月	研究と教育の報告第4号
18	大学における授業改善の試み――誰と試みたか	単	2000年 6月	北海道の教育2000年版
19	「学童疎開」「師範学校」「疎開」	単	2000年7、10月	日本歴史大事典（小学館）
20	北の大地に国立大の礎―「125年史」編集で初代総長・佐藤昌介の業績再評価	単	2001年 6月15日	日本経済新聞
21	現代日本子ども状態史を展望して(3)	単	2002年3月	研究と教育の報告第5号
22	教育学研究科・教育学部	鈴木敏夫・須田勝彦・逸見勝亮	2003年12月	北大百二十五年史（通説編）
23	大学における教育と研究	単	2004年 1月	学士会会報第844号
24	「教育研究の状況」評価に相対して	単	2007年 5月	IDE第490号

(9)学会発表

1	戦後教員養成制度史	単	1971年 2月	北海道教育学会第15回大会（北海道大学）
2	師範学校における「第二部」制度の成立とその歴史的意義に関する一考察	単	1971年 9月	日本教育学会第30回大会（東北大学）
3	師範学校における本科「第二部」設置の歴史的意義について	単	1972年 2月	北海道教育学会第16回大会（北海道教育大学）
4	教員養成制度「改革」の現状と問題	単	1974年 2月	北海道教育学会第18回大会（北海道教育大学）
5	1931年「師範学校規程」改正に伴なう第二部修業年限延長の歴史的意義	単	1976年10月	教育史学会第20回大会（青山学院大学）
6	教育史における1930年代―国家と教育――日本を中心として―	単	1983年10月	教育史学会第27回大会（金沢大学）
7	少年兵史素描―下士官の速成と国民教育	単	1989年10月	教育史学会第33回大会（静岡大学）

8	第二次世界大戦後の日本における浮浪児・戦争孤児の歴史	単	1993年10月	教育史学会第37回大会（山形大学）
9	教師教育の立場から―大学教育が果たしている、果たしえないでいる役割	単	1996年 6月	一般教育学会1996年度大会（札幌大学）
10	皇后のビスケット―集団疎開学童ニ対シ御激励ノ思召	単	1998年10月	教育史学会第42回大会（筑波大学）
11	自衛隊生徒の発足―1955年の少年兵	単	2001年 9月	教育史学会第45回大会（上越教育大学）
12	戦歿者寡婦奈良特設幼稚園保姆養成所の歴史	単	2003年 9月	教育史学会第47回大会（同志社大学）
13	品川台場の浮浪児たち―東水園の歴史	単	2004年10月	教育史学会第48回大会（法政大学）
14	ラジオドラマ「鐘の鳴る丘」考―浮浪児・戦争孤児へのまなざし	単	2006年 9月	教育史学会第50回大会（大東文化大学）

（10）北海道大学学内誌等

1	少人数教育の威力は絶大（一般教育演習Ⅰをふりかえって）	単	1988年 4月	瓔珞第41号（北海道大学教養部報）
2	講座恵迪＋カチャトーレ	単	1997年 2月	えるむ第81号（北海道大学学生委員会）
3	研究していれば教育できるか?	単	1997年 6月	センターニュース（高等教育機能開発総合センター）
4	恵迪SPECIAL　日曜日の晩餐	単	1997年12月	えるむ第85号
5	恵迪寮探訪記　風呂の巻	単	1998年 9月	えるむ第89号
6	上杉重二郎名誉教授（訃報欄）	単	2000年12月	北大時報第561号
7	カルメラ焼と虫下し	単	2003年 9月	ほけかんだより第33号（北海道大学保健管理センター）
8	母の筆跡―学校を介した遺品	単	2004年 6月	ほけかんだより第42号
9	太陽燈	単	2005年 7月	ほけかんだより第54号
10	『十五少年漂流記』から『大東亜戦争陸軍衛生史』へ	単	2005年 9月	楡蔭第120号（北海道大学附属図書館報）
11	青年を急かせてはいけない	単	2005年12月	フロンティア第28号（北海道大学東京同窓会会報）

12	羽ばたけ、才能貧しき未来形よ!	インタビュー	2006年	紀伊国屋書店ブックセンターニュース第11号
13	歌人·宮柊二の病 —『山西省』再読	単	2006年 6月	ほけかんだより第64号
14	培われたコミュニケーションを基礎に大学のブランド力を高めていく	インタビュー	2006年 7月	PRIR(宣伝会議)
15	卵のぬくもり	単	2007年 3月	ほけかんだより第72号
16	図書館長再任にあたり	単	2007年 7月	楡蔭第126号
17	利用者の76%は学生·院生、経費の68%は電子ジャーナル	単	2007年 7月	北海道大学附属図書館概要
18	法人化後の北海道大学	単	2007年 9月	関西エルム新聞第58号(北海道大学関西同窓会)